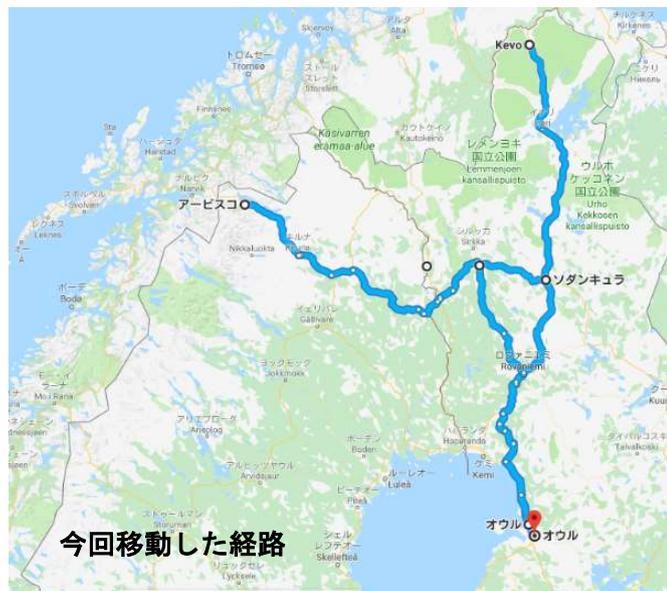


# フィンランドースウェーデン 2,400 km の大移動

大山伸一郎

2018 年秋、フィンランドのオウルから陸路で、スウェーデンのアービスコ、フィンランドのソダンキュラ、ケボ、そしてオウルに戻る、長距離バスと車を乗り継いだ計 2,400 km の出張を行うことになった。期間は 1 週間。アービスコでは、スカンジナビア域における観測活動の協力体制について、各国の観測所代表者と協議する。ソダンキュラとケボでは、カメラのメンテナンスと、観測所の人たちとの打ち合わせを行った。



まずオウルにあるバスセンターから長距離バスに乗り、キッティラへ。フィンランド国内の町と町を移動する手段は、飛行機か、長距離バスか、列車。オウルには、ヘルシンキから列車が延びているが、終点のロバニエミまで列車で行っても、結局、バスに乗ることになる。キッティラは、フィンランドで有名なスキーリゾートで、ハイシーズンには多くの観光客で賑わうが、今はまだ雪が無く、バスに乗車する人もまばらだった。座席をウェブ予約することもできるが、今回は当日、ドライバーに料金を支払い、適当に着席した。

3 時間ほどでキッティラに到着。そこで、ソダンキュラから自動車で来た同

僚研究者と合流し、昼食を食べ  
てから、スウェーデンのキルナ  
へ。キッティラはフィンランド  
の町だから、国境を超えること  
になる。念のため、パスポートを  
持参した。国境には、監視員の詰  
め所らしき建物があるものの、  
人の気配はなく、ゲートも何も



キルナ郊外にある IRF



これが往年の全天カメラか！  
(IRFに展示)

ない国境を、あっという間に通過。同僚が言うに  
は、過去、一度も監視員を見たことはないそうだ。  
EU 加盟国の中の往来は自由なので、そういうも  
のなのかもしれない。キルナで一泊し、翌日、ち  
よっと IRF 研究所をお邪魔した後、午前中にア  
ービスコに到着した。

アービスコ観測所は湖のほとりにある施設で、  
かなり立派な観測所設備が整っている。またハ  
イキングコースの基地としても有名で、夏場は  
混み合う。しかし、今は夏の観光シーズンも終わ  
り、観光客はゼロ。

当観測所は、スウェーデンが展開するオーロラ  
カメラ群の一つでもあり、会議の合間に観測小屋を  
見学させてもらった。何十年と運用してきた歴史あ  
る建物で、厳しい自然環境において安定にカメラを  
運用するための工夫が、随所に見られた。

会議も無事終了し、今度はソダンキュラまで、  
7-8時間くらいだろうか、車で移動。キルナを通  
過し、誰もいない国境を越え、キッティラについたころには夜の7時。みんな腹  
ペコだが、ここで食べると帰宅がさらに遅くなるので、我慢して残り 80km を走  
る。ソダンキュラに着いたのは夜8時過ぎ。みんな疲れて、言葉少なに家路へ。  
明日は早朝にケボへ出発するので、早く寝ないと…。



アービスコのオーロ  
ラカメラ小屋

明朝、まずはソダンキュラ近郊にある観測所に立ち寄り、カメラの状態を点検した。特に異常なし。カメラを設置するシステムを、現地エンジニアと一緒に一から作り上げたが、温度管理を始め、彼らが経験して得てきた様々なノウハウを駆使したおかげで、ここまでとても安定して稼働している。雪はまだ降っておらず、道路状況も良好。ケボまで約4時間。雪が降らなければいいが。



途中、イバロという町で昼食をとり、ケボに到着したのは夕方。幸い雪は降らず順調に移動できた。しかし、途中、トナカイの家族に何度か遭遇した。フィンランドの北部で運転するときには最も注意すべきなのは、このトナカイ。道路は開けているので、森の中



を移動するよりも楽なため、道路際を、時には、堂々と道の真ん中を歩いている。車が近づくと逃げてくれるが、中には、わざわざ道に戻ってくる輩もいる。その行動を見ていると、あまり利口そうな動物には見えない。サントクロースもさぞかし苦勞して橇を曳か

せていることだろう。

ケボ観測所は、ツルク大学（フィンランド南岸にある）が、主に生物・植生関係の観測を行う施設として管理している。オーロラ観測をしているのは、フィンランド気象研究所と我々だけで、両グループとも、同じ建物の、同じ光学ドームにカメラを置いている。この建物は、夏季にはゲストハウスとして利用されている。暖炉があるログハウス



で、窓からの眼下に湖が広がる。「こんなところで外を眺めつつ、1か月くらい、研究活動できたらな…」と思わせる、とても環境が良い場所にカメラが置いてある。作業をさっさと終わらせて、1日だけでもその夢をかなえよう、と思っていたが、予想以上に作業にてこずり、結局、夢はかなわず…。



翌朝、ケボ観測所の周りは薄っすらと雪が積もっていた。カメラ小屋の周辺には、小さいが爪が鋭そうな生き物の足跡が、続いていた。ソダンキラへの帰り道も、来る時には全くなかった雪が、一面を覆っていた。このまま根雪になるかどうかはわからないが、冬が始まったのかな、と思わせる光景が、目立った起伏の少ないフィンランド北部に、延々と広がっていた。



長距離バスでソダンキュラからオウルに向かった。オウルに近づくにつれて、枝と幹だけだった白樺から、葉が黄色に色づいた紅葉の季節へと若干遡ったように見えた。これから約2か月、オウル大学で研究活動を行う。また秋と冬の境目がみられるのかな…（しかし、結局、2か月間、積もるような雪はオウル市内で降らず。暖冬なのは、日本だけではなさそうだ。）